

●座談会●

バックラッシュに向き合うために

「ジェンダー/ジェンダーフリー」再点検（上）

ご出席者（発言順）

細谷 実（ほそや・まこと）さん
関東学院大学経済学部教授
哲学，ジェンダー論

金井 淑子（かない・よしこ）さん
横浜国立大学教育人間科学部教授
倫理学，ジェンダー論

広瀬 裕子（ひろせ・ひろこ）さん
専修大学法学部教授
教育行政学，セクシュアリティ論

●市民・メディア・研究者の交流を目指したが

編集部 3月に開催された「『ジェンダー』概念を話し合うシンポジウム」（午前部・午後部）が、この座談会をお願いするきっかけになりました。学者・研究者がグループを作って運動に関わることはあまり少ないという印象があって、ちょっと驚いたというか。アカデミックな世界にいる方は、市民運動的なものに距離を置きたいのだろう、と。

もう1つ、シンポの中では若桑さん（若桑みどり・川村学園女子大教授）が、性教育の方法について疑問を出された。疑問の中身はともかく、疑問を出されたこと自体によい意味で驚いたんです。ジェンダーや性教育問題を見ていて、もっと仲間内の相互批判があっただけいいのになあと、ずっと感じていたものですから。

今日はこのへんを語り合っていたらいいわけですが、シンポを開催する上で、迷いみたいなのはなかったんでしょうか？

細谷 学者・研究者が運動に関わるのが少なかったということですが、必ずしもそうではなくて、自分の関心のある個別の運動には個人的に関わることが、わりとあると思いますよ。

ただ、このシンポのきっかけというのは、「呼びかけ」にもあるように、国分寺市の人権講座の講師に上野さん（上野千鶴子・東京大学教授）が、市民によって選ばれていたのに都の教育委員会が拒否した例の事件

を、東京都に抗議する中で見えてきたことにあります。

それは1つは、性教育を研究する人とそれを実践している人とのつながりはあったのですが、市民とのつながりが少なかったこと。もう1つは、あれは毎日新聞が報道したことにより「事件」として公になった。そういう意味では毎日新聞のジャーナリズムとしての功績だと思うのですが、ただいろいろな一般メディアによる報道を見ると、メディアの人があまりジェンダーをよく理解していない、という感じがしたんですね。

それで市民とメディアと研究者。この三者で対話・交流ができないか、というのがそもそもの趣旨だった。報告者としてもメディアの方をと初めは考えていたんです。メディア、とくに大きなメディアは「不偏中立」をポリシーとなすためか、なかなか報告者として立ってくれる人がいなかった。それで1つの軸が見えなくなってしまった。

ただ各メディアには案内を出していたので、いろんな方がフロアには参加されており、趣旨の半分は実現できたと思います。

金井 日本女性学会は細谷さんからの幹事会への要請を受けてシンポの主催者に名を連ねていますが、実際の準備・運営は上野さん問題で動いたメンバーを中心とする実行委員会のみなさんにお任せした感じで、それに便乗させていただいたという感じです。ただ、「学者・研究者は運動に関わらない」という印象で女性学会を見てらっしゃるのは大きな誤解ですね。

広瀬 学者と運動を二項対立させる発想がしばしばあるけど、それはあたっていないと思う。たとえば、研究者が研究以外に何もしていないかと言うとそんなことはなくて、生活の中でいろいろぶつかり試行錯誤しているわけですー学内行政などもその1つだし。それも「運動」でしょう。運動にはいろんな次元の、いろんなパターンがある。理論作業それ自体も言ってみれば運動でもある。

金井 そもそも「アカデミズム」というイメージで日本女性学会に押し込めることがまず、そこから大きな誤解が生じるかもしれませんね。日本女性学会は研究者・市民の垣根をできるだけ取り払って会員資格のハードルも低くして、平場主義を原則として運営していますから。

ただ、この間はバックラッシュ派の攻撃もあるので、会員2名の推薦があるとか、それが得られない場合は、これまでの研究や活動を自己申告していただくようにしましたけど。ですから「学会」としては、かなり市民とつながった感覚で、普段着の感覚でやっている。

● 「女性学」の特殊性

細谷 女性学という学問に、ある特殊さはあると思う……たとえば地理学会とかがあるとする。その学会の会員が地理学の課題に関わらせつつ学内

行政をやるかという、やらないでしょう。女性学の場合、人間関係があるところ、あるいは男性・女性というジェンダーがあるところでは、いつでもジェンダー平等を言い続けますから、その意味では学内行政を運動と見ることはできますね。

だからバックラッシュの人からすると、どこにでももぐり込んで陰謀を行っているように見える。しかも、かつての国際共産主義運動のように、統一的なセンターが存在して全国に指令を出しているなんていう妄想にも取りつかれている（笑い）。

広瀬 そう、女性学自体が運動なのね。

細谷 そうした、少し特殊なところがある学問領域だと思っていますから。

金井 逆に言えば、状況へのコミットという面でーたとえば現下の憲法改正問題や教育基本法もそうですが、女性学会がダイレクトに発信していく回路が少し鈍くなっているかな、という思いは、私にはあるんですが。

広瀬 でも、全部同じように、そこにコミットしないといけないわけではない。

金井 もちろんそうなんですけど。学会と市民運動とのやはり分節・線引きはしておかないといけないわけで、私自身、「共謀罪」の問題に幹事会としてなんらかの態度表明すべきでないか、といった問題提起が幹事会になされれば、それに対して、そこまでみんな持ち込んでしまったら、学会としての活動がはっきりしなくなるから線引きしておきましょう、個々人で市民としてやるべきだと言ってるんだけど、それで果たしてすむのか……。

広瀬 たとえば憲法にしても教育基本法にしても、「改正」反対という方向にコミットしていないと、無関心であるように見られることがある。私、そうではないと思っています。「改正」をしないことが唯一の正義である、ということではないと思うから。

金井 ええ、そうなんですけど、そのへんがむずかしい。

細谷 女性学の特殊性の話の続きでもありますが、教育基本法の改正に関して、教育学者はどう考えているのか、ということなんです。つまり教育学者、あるいは教育者の中には、基本法改正に賛成の人も思う。

広瀬 「改正」の動きを危惧して教育関連15学会で共同公開シンポジウムをやっています。3回くらいやったと思う。でも、学会ですから、おっしゃるとおりいろんな考えをもつ人がいるわけで、必ずしも1つの方向で氣勢をあげましょうというのではなく、事態を検証しようというあたりが

最小限のコンセプトであると思います。

一般的に左翼の人たちは、基本法を守るべき価値があるというスタンスですが、でも、保守でなくても私や周辺にいる人は、教育基本法の問題点を研究して指摘してきました。ちなみに私の修士論文の題材は教育基本法第5条でした（「第5条 男女は互いに敬重し、協力しあわなければならないものであって、教育上の共学は認められなければならない」）。で、教育基本法それ自体にも問題があるのに、そのまま維持しろ、守れとは言えないわけです。

金井 「守れ」と言わないことが、結果として改革路線に与することになりかねない。

広瀬 でも、それは安易な言い方で「守れ」、と言っているからじゃないのかしら。足をすくわれると思うんですよ。たださすがに最近では、運動の方たちも「守れ」から「改悪反対」というようにトーンを変えてきてますよね。

金井 でも、そういう議論で立ち止まっては、いけないのではないのでしょうか。

広瀬 もちろん止まらないでやっているんですよ（笑い）。

編集部 いずれにしても、私にはさっきのような思いこみがあったので、今回のシンポが開かれるという案内を見て、「ついに、学者たちが立ち上がった！！」みたいな、そういう驚きと期待をもったんですね。

金井 いえいえ、この動きはすでに国会のジェンダーフリー教育をめぐる議員質問や、さらに大学など高等教育機関の場面で展開された女性学・ジェンダー研究にまで批判の矛先が向けられていた。

そうして、ジェンダー概念の使用やジェンダーフリー教育についての政府の姿勢がかなり後退していることが明らかになったあたりから、女性学・ジェンダー研究の周辺から危機意識が強く表明され、その中でも女性学会はほかの学会に先駆けて声明を出しましたし、またほかの学会がそれに続くといった動きもありました。ですから、今回のシンポが直接には上野さん問題を契機にしてはいても、一連の流れがあったんです。

●疑問が残る「ジェンダー概念」

編集部 金井さんと細谷さんは「ジェンダー概念シンポ」の主催者側ですが、そのシンポについて広瀬さんはどんな感想をもたれていましたか。

広瀬 シンポに先立って、最初の抗議文でしたか、そこで「ジェンダー」

が定義されていたんですが、少なくとも私は、そこにあった定義は納得できなかつたし、そんなところで定義されては困るとも思いました。抗議すること自体大事なことだと思ったけど。で、ちょっと婉曲な感じで意見を述べたんですよ。私としては、あの定義はまずいというのは、当たり前前意見だと思っていただけで、そうでもないように。

注) 「上野問題」に関し、若桑さんらが呼びかけ人となって、都知事らに提出した抗議文のジェンダー定義は次のとおり。

.....ジェンダーは、もっとも簡潔に「性別に関わる差別と権力関係」と定義することができる。したがって「ジェンダー・フリー」という観念は、「性別に関わる差別と権力関係」による、「社会的、身体的、精神的束縛から自由になること」という意味に理解される。したがって、それは「女らしさ」や「男らしさ」という個人の性格や人格にまで介入するものではない。..... (以下省略)

原文はhttp://www.cablenet.ne.jp/~mming/against_GFB.html 参照。

細谷 意見はいろいろあって、内閣府の再定義がおかしいという意見も強くて。それに対して議論しましょうというのもあった。広瀬さんの話はメーリングリスト上の話ですね？

広瀬 ええ、ふだんは私、だまっているんですけど。.....その後、多少定義は修正されましたが、内容的にはほとんど変化がない表面的な修正に、私には見えませんでした。それに対しても、修正をしないほうが良いという意見がありましたね。

金井 そうすると、あの呼びかけ文には、みんな、かなり抵抗感を感じながら、だけど、ということですか？

細谷 あれは、原案作成チームがかなり叩いてから出した、というようなものでもないから。

広瀬 ジェンダーをああいう形で定義したその抗議文に賛同者として名を連ねてしまったら、あとで自分のクビしめてしまうでしょ。ジェンダーをその定義でないと使えなくなってしまう。私はふだん異なった意味で使っているから、それは困ると思った。

事件の取り組みに対しては賛同したいと思ったし.....でもジェンダー概念が違うから降りる、というのもなんだし。いろんな人が賛同できる抗議文にしてほしいなあと思ったわけです。

金井 具体的にどんな違いがあったんでしょう？

広瀬 文章をもってきていないから、ここで正確な話はできませんけれど、「権力関係」という言葉が入っていたと思います。私はジェンダー概念を特定の権力関係の表出に限定するようには使っていませんから。

金井 でも、ジェンダーの概念の含意には、そのレベルもあるでしょう？
そしてフェミニズムはまさに性別秩序の権力構造の分析概念として、ジェンダーを家父長制概念とともに引き入れたのですから。

広瀬 つまり、そこで言われている権力関係というのは、女性にとってマイナス的な権力関係のみ想定しているわけで.....。

細谷 そのレベルはあるけれど、それを含まない学問的な使い方もあるわけだし。僕は、そこまで含めると狭くなるので反対なんです。24条改正反対運動（24条は、両性の平等を定める）の時も、たとえ正論であつても、賛同するのにあまり高いハードルは立てないほうがいいと考えていました。その場合、正義を得て政治を失うことになるでしょう。

金井 だから、私もそのへん抵抗感があつたけど。それをコンセンサスにして作っていることの問題なんですね。

広瀬 ジェンダーには、理念的にはですけど、女性にとってマイナスな権力関係によって構成されたのではない形態もあり得ると私は考えていますから。

つまり社会的な性の関係を生物学的な性の次元から相対的に分離させて「ジェンダー」と名づけたことによって、いまの差別的なジェンダー構造が必ずしも身体構造から発する宿命ではなく、それとは違うジェンダー構造を想定することができるようになったわけでしょう。

そこにジェンダー概念の功績の1つがあると思っています。常にジェンダーには抑圧的な権力関係がつきまとうんだつたら、夢も希望もなくなってしまふでしょ。多様なジェンダーの形があるのであつて、ジェンダーは形を変えるけれど、なくなるわけではない。

金井 そうすると、バックラッシュ派に「性別をなくす」という口実を与えることになるのかな？

細谷 バックラッシュ派は、そう言うでしょうね。フェミが権力関係をなくそうと言つていて、ジェンダーが権力ならば、ジェンダーをなくそうということになる。そして、権力関係を含んだ意味で定義しようとしている人は「もちろん、そうだ」と言うでしょう。

広瀬 いま現在、問題になるジェンダーの固有の形を、私は、「性別役割分業」と呼び分けたりしています。

金井 「問題になる」というのは、ステレオタイプ化された、とか？

広瀬 抑圧的な権力関係を含んだ、というか。それはもちろん、セックスに還元されるのではない権力関係ということですが。

● 「性別をなくせ」と言っていた？

編集部 ジェンダーは「社会的、文化的に作られた性別あるいは性差」といった一般的な説明があると思うんですが、それでは、いけないんでしょうか？

学者がジェンダー概念の定義をすると、いつまでも議論になるようですが、でも“そんな細かなことを言わなくて、目の前にいる大きな敵をどうするんだ！”，と私は言いたい（笑い）。

広瀬 そうではなくて、その使い方のところをバックラッシュ派が攻撃してきたんだと思うんです。たとえば、性別役割分業を「ジェンダーの一形態」と言うべきところを、言葉が長くなって言いにくいから、たぶん「ジェンダー」と使っている場合があるんだと思うんです。

ですからその場合、「ジェンダーをなくす」という言い方で言われているのは、内容的には「性別役割分業をなくす」ということなのであって、性別をなくす、ということではない。

でも、ジェンダーを「社会的性差」という意味で取れば、「ジェンダーをなくす」ということが「社会的な性差をなくす」，と聞こえちゃうでしょ。それがバックラッシュ派に使われていると、私は思うんです。

細谷 経済学での用語法とは違うものなのですが、「分業」という言葉を、指揮・管理者と部下みたいな、そこには差別というか力関係がある垂直的な分業と、八百屋と魚屋のような対等な水平的な分業に分けて使うこともできますよね。

で、ジェンダーを、どう考えるか。ジェンダーの用法もそれに似たものがあると思います。対等なジェンダーがありうるのか、差別的なものしかないのか。もしも差別的なものしかないと言ったたら、じゃあ、平等にするためにはそれを、そもそも撤廃するしかない、ということになる。

というわけで、「やっぱり性別をなくそうとしているんだ」というふうに、バックラッシュ側は批判してきたのですよ。

広瀬 そう、林さん（林道義・東京女子大学元教授。バックラッシュ派の1人）と話をした時があるんですね。彼が「ジェンダーフリーというのは性別をなくすでしょ」と言うから、「それを言う人たちは、たぶん、そうは言っていない。あれはジェンダーによる差別やジェンダー・バイアスをなくそう，という意味なですよ。セロハンテープをセロテープと言うように、ジェンダー・バイアス・フリーというのをジェンダーフリーと言ってるんですよ」と私は言ったんです。

そしたら林さんは「そうなのう？」と言ってました。私は「そうよ」とー。バッシング派の人たちは「ジェンダーフリー」を言葉どおりに取って、性別をなくすと取ろうとしたわけです。

細谷 でも、確かにそう取られる実践も、あるでしょ？

広瀬 ありましたね。フェミニズムや女性学では重要なテーマでもある「差別」と「区別」の関係を考えるモチーフのあれです。差別の根っこには区別があるわけで、その関係を突き詰めると、差別をなくすには区別をなくさなければいけないのか、という問題が出てくる。差別について真剣に考えた人は、そのへんを1回は通っている。1つの目標として、性差自体をなくすことを目標に立てた時はあったと思います。

金井 「時」ではなくて、それは底流としてずっとありますよ。なんていうのか、こういうのは、要請命題というのかな。性別の区別が性差別の原因になっているという現実があつて、いったん区別を認めたらそれがどんどん肥大化されて、男と女の役割は違う、住む世界も別だといった考え方が是認されてしまう。そうした形というかロジックで、「差異」が差別を生む。

だとすれば、一番の根底にある違いを最もミニマムに見ることにして、それが「性差は、妊娠と授乳だけだ」という言い方があったわけで、ともかくその性的差異に大きな意味づけをしてはいけないのだという論を展開してきた。このロジックの中では、フェミニズムの要請命題が、どこかで事実命題として是認されて受け止められてきた。だから性差は、それを取り払えるなら取り払うべきだとなる。

広瀬 そうですよ、それって、ずうっと、あった。林さんだけでなくそうした議論を知っている人が保守派にもいる。だから、「フェミニズムの人たちは性差をなくそうって言っているんだ」と彼らが言っても、あながち間違いではない。全然トンチンカンではない、と私は思っていますよ。

金井 フェミニズムは、「差異ミニマイザー化論」というか、「性差の無化」と言っていた。セックスに対するジェンダー概念を立てることによって、性的な差異が無化できるという幻想をもつことになったというか、そうせざるをえなかった。

要請命題と言ったのはそういうことで、そのことによって足を取られているという認識を、フェミニズムはもつべきだと思うと私は言いたかったわけ。江原さん（首都大学東京・江原由美子教授）はそれを、確か被差別者が強いられるジレンマ、畏なんだという言い方をしていたかもしれない。

広瀬 そうした議論の文脈で「女らしさ」や「男らしさ」というのを批判したり、なくそうとすることもしましたよね。私、個人的には、自分自身でもそうした議論を通過したあと、けれど性差をなくすという方向の議論

にはどうしても与することができず、苦悩しました、90年代に入るところに。「ジェンダー論」というよりは「セクシュアリティ論」という看板でものを考えるようになったのは、そうした思いがあったからです。

ほかの人たちは、こうした問題をどう解決したんだろうとっていました。そうしたら、昨今のバッシングの流れの中でいつの間にか、みんな口を揃えたように「性差をなくそうと言っていない」と言ってますよね。ちょっと不思議な気がします。

●伝統文化を破壊する？

編集部 びっくりしながらお話を聞いているんですが（笑い）。

バッシング派の主張というか宣伝は、「フェミニズムは性差を否定し、さらに日本の伝統文化も否定する」に尽きるんだと思う。自民党もまったく同じことを言っていた。確かに、ひな祭りに否定的なニュアンスの冊子が出たのは事実だけど、その1つだけでしょ。それを、彼らは「鬼の首」を取ったかのように宣伝している。

私はフェミニズムに関しては、勁草書房なんかの本を読み始めても、むずかしくていやになって、途中で投げ出すタイプで、フェミニズムのことが十分には分かっていません。

「男は敵だ」なんて言葉があったぐらいですし、むかーしはお話のような議論があったのは承知してますけど、学校でやってきた性教育やジェンダーフリー教育に性差否定なんて、ないでしょ？ そのへん、彼らの宣伝になぜクリアに反論しないのか、それが不思議でならなかったんですが……そういう単純なものではない、ということなんですか？

細谷 いまのお話は、現在のフェミニズムに対する、非常に好意的な解釈だと思います。現在のフェミニズムが語っている公式見解をそのまま受け取ってしまったような、そうした解釈だと思います。

伝統を否定しないという言い方なんだけど、たとえばひな祭りを一緒に祝いたい男の子をまぜてあげるとしたら、これはもう伝統を変えているわけじゃないですか。部分的には。それを指して、「伝統を否定している」と、言いたい人は言うでしょう。だから、その意味では伝統を否定しているんですよ。つまりひな祭りの旧来からの姿を、まったく無批判的には受容していない。

編集部 でも、家庭や幼稚園でひな祭りをやっている時に、そこに男が入ってきたとして、「これは女の子のお祭りだから、あんたたち出て行って」とまでは、バッシング派は求めないでしょう。「ひな祭りをやめてしまえ、と彼らは言っている」、というのがバッシング派の宣伝でしょう？

広瀬 でも、やめてしまえと、言ってたこと、あるんじゃないですか？

金井 言ってると思いますよ。

細谷 そこまで、言っていた？

金井 ええ、そうなんです。

細谷 そうすると、だれが、どこで言ってたかみたいなの、検証が必要になってくると思うんだけど。

金井 あの啓発リーフレット（日本女性学習財団発行「新子育て支援—未来を育てる基本のき」）のメッセージでは、ひな祭りは、悪しき、廃止すべき伝統というふうに受け取られてしまってますから。



日本女性学習財団発行
「新子育て支援—未来を育てる基本のき」より

細谷 いや、あれは「ちょっと問題がありますね」という問題提起で。廃止しろ、みたいな話じゃないと思いますが。

金井 もちろん、そうだと思いますよ。だけれども、あのリーフレットが作られるその前には、女性センターなどがジェンダー啓発資料として開発したジェンダーチェック表などがありますよね。気づきのためのわかりやすさを狙ったものだというのももちろん分かるのですが、でも、ああいう紋切り型のチェックでジェンダー意識が低いだとか高いだとか言ってしまうのはどうかなあーと、疑問というか抵抗感は私などにもありましたね。

その文脈の中で、「ひな祭りを無意識に祝っていませんか。それはジェン

ダーのすり込みにつながる」ということをチェックさせるんですから、「これはあつてはいけない」と読まれてしまっても仕方ないのではないかと。

細谷 もう一点言うと、僕はわりといろいろな目的設定に寛容なんです。たとえば、家族主義の社会を作ろうとする人の主張にも、愛国心を広めようという人の主張にも。ただ、それを実現するために、強制という手段を用いなければ、です。ハードな強制はもちろん、ソフトな強制もね。都教委の日の丸・君が代推進政策に反対なのは、主にその手段の点においてです。

●バッシング派も、「それなりに正しい」？

編集部 そうすると、バッシング派が言っていることは、「それなりに、正しいのよ」ということで、終わり、でしょうか？

広瀬 正しいというか、それを彼らも見てきたんですよ。バッシング派には、世代をともにする人たちもいるから、一緒にそうした流れを見てきた。

金井 フェミニズムの、とくにジェンダーフリー教育の現場ですごく熱心な人たちがやってきたことが、その意に反した政治効果をもたらしたのだ、という認識は必要ではないのかしら。

広瀬 「ジェンダーフリー教育」なんていうような言い方をする前から、性別役割分業が生物学的なものを根拠にするのでないとすると、どのようなか、みんな関心をもったわけです。とくに教育学の分野では。

それでジェンダーの再生産のプロセスや構造は研究課題になったわけですよ。階級の再生産を「隠れたカリキュラム」や「学校文化」という新しい概念で理論化しようとした流れとリンクしています。どのような環境で、どのような条件の下で「ジェンダー」や「ジェンダー意識」が作られるのか、これは、1つのーというより、巨大なテーマだったわけですよ。

そうした中で、女の子と男の子は育つ過程で違った環境に置かれていることが指摘されるようになり、慣習や伝統行事、学校の男女別名簿などが検討対象になっていくのです。

細谷 つまり、生物学的に男らしさとか女らしさとかが決定されるとは、なるべく認めたくなかった、と。そこで、現実として男らしさ女らしさをたとえば15歳の子どもで調べてみると、もうすでに身につけている、いろいろと。好きな色とか、好きな服装とか、好きな遊びとか。それは

どっからきたのかということ、環境のほうから考えていこうと。そういう研究をいっぱいしてきたわけですね。

広瀬 ええ。その積み重ねは、日本だけじゃなくて、各国で行われてきました。

細谷 そこで、だ。もしも環境がその原因だったとしたら、じゃあ何をしようとしていたんですか？ 男の子と女の子と同じ環境にして、差異のないような人物に育てようというのが目標だったんですか？ じゃあ、やっぱり「中性化」じゃないですか。

金井 そうですよ。すごく違和感を感じてました。

ですから、フェミニズム・女性学からのメッセージとして「性差より個人差」とか「ジェンダーフリー」という言葉を私自身が使う時には、フェミニズムは、性差別の現実を変えるための思想・政治であるのだから、性差環境要因をできるだけなくしていこうというところでは「性差はない」というけれど、環境条件を性差のない状況にしてもなお、その結果として見いだされるかもしれない性差についてまで否定するものではないのだ、という補足説明はしてきましたね。

●性教育の背後に共産主義？

編集部 ええと……展開がますます過激になってきた（笑い）。

でも、疑問があるんですが。その論法は、過去にこんな経緯があったから、現在もーと言ってるだけのような。たとえば日本の性教育の父とされる山本宣治は、1920年代の労農党の幹部で、たぶん共産主義者だったんでしょう。

バッシング派は、性教育の有力な団体である性教協（“人間と性”教育研究協議会）のルーツがそこある、だから「彼らの性教育の狙いは共産主義革命だ」なんて宣伝の仕方をするけど、低俗なデマゴギーですよ。

いま言われた、ジェンダーの元には性差否定の潮流があるから、「ジェンダーフリー教育は性差を否定しようとしている」という論法は、それと同じでしょう？

細谷 僕は、金井さんより年齢が下だから、それほど昔のことはリアルタイムでは知らないんだけど（笑い）、僕の印象だと、たとえば男と女の差異をなくそうと言ってた人も、まあ、中にはいるだろうと。だけど、それがあつた時期、本当に主流になっていたのかどうか、それが分からないんですね。

金井 社会教育とか、そういう場面で女性学が啓発的なメッセージを発する時は、ほんとうにジェンダーフリーと言ったら、性差をなくすことのよ

うに受け止められていたのではないかしら。

私はフェミニズムから女性学に行ったのだけど、80年代半ば以降の当時の社会教育の場面にもけっこう関わっていて、主婦の自立課題として語られていた3つの自立論（経済的・精神的・生活的自立）や、性差はないといった議論にも、自分もそれを使いながら違和感をもっていた。

むしろ性教育との関係で言えば、日本の主婦たちにとって自らの身体と性に対する自己決定・性的自立の性教育が必要ではないか、と。そういう問題意識はなかなか届きにくかったですけどね。

細谷 それは、いつごろのことなんですか？

金井 私がフェミニズムに登場したのは80年代半ばだから、80年代ぐらいかな。

細谷 80年代なら僕も知ってるな。

広瀬 私が学問的に物心、つき始めたころ（笑い）。いや、ほんとうに。私は教育学専攻だったからね。そのころはそうした議論が盛んでしたよ。

細谷 うーん。

金井 だから私は、いま言ったように、それに対して、いつもエクスキューズしてたのね。だけど、なぜ、いまここであらためて言わなければいけないか。

同じ条件づけで育てた結果、もしそこに差異が出てきたら、その差異はあってもいい差異として認めようという理論仮説で、ジェンダーフリーというのは性差がない条件で、つまり男らしさや女らしさの規範的縛りをできるだけ取り払って子どもたちを育てようと主張しているのだと。

そのほうが「そんなこと言っても、肉体の違いがあるじゃない？」と思っている人たちの実感には、落ちる、フィットするわけですよ。現実に女の子と男の子の生き方がものすごく枠づけられていたわけだし。それで、80年代後半から90年代にかけての女性学の主張は、そう言わざるをえなかったー。

細谷 僕は、その時代を知っているけど、男女間の壁をもっと低くしよう、くらいのもんと思っている。混合名簿にせよ、高校共学化にせよ。

広瀬 シュラミス・ファイアストーンが、人工生殖まで視野に入れて女性が産む性であることに性差別の源泉を見ようとしたり、同じような発想からダナ・ハラフェイがサイボーグ・フェミニズムを唱えたりする流れには、ただ単に壁を低くする以上の思いがあつと思う。

女性に対する抑圧は経済的階級がなくなれば解消するわけではなく、別

の要因から発していると考えられるようになる流れがあったでしょ。で、男女の身体差を含めて男女の違いが性差別の根源だと考えられて、その差を理論的には放置できなくなるわけよ。その辺の「悲壮」な思いを私も共有した。

でも私は「らしさ」とか性差を否定しない理論構成を、自分の課題とするようになるんです。なぜそうするようになるか。これに説得的理論的な理由を示すことはむずかしかったけれど、1つ確かなことは、性差を否定してしまうと、性別で人をカテゴライズして恋愛することができなくなってしまうのですよ。

つまり異性愛も、同性愛も。それが不可能になっちゃう。同性愛に光が当たり始めていた時期でもあり、その問題を考えるためにも、性別はなくなっただけとはいけないと、少なくともこう考えることにしました。

編集部 「ジェンダーフリー教育」関連の一般書を見ると、お茶の水女子大学のジェンダー研究所の方たちが目立つようなんですけど、あそこが中心なんですか？

広瀬 お茶大のジェンダー研は、もともと教育学の人たちもいたから、確かに指導的な役割は果たしていただきましたね。貴重な役割だと思いますよ。ただ、性教育のルートとは違う。

先ほど山本宣治という名前が出てきましたけど、山本宣治は戦後日本の性教育にはそれほど影響を与えた人というわけではないです。むしろ彼を知らない人のほうが多くて、発掘の対象とされていると言ったほうがいい。

性教協も民間団体として大きな役割を果たしていますけれど、文部省のバックアップで推進されていた性教育の流れとはまた微妙に異なっていたし、それよりも何よりも性教育それ自体がそんな注目されていないマイナーな領域で、誰も見向きもしない時期が、ずうーと続いてきたと言ったっていい。こんなに華々しく、舞台の真ん中でスポットライトを浴びたなんていうのは、初めてのことでしょ。皮肉よね。

金井 いまの性教育は、異性愛教育だけでなく、同性愛教育とかエイズ教育などに踏み込んでいる。

広瀬 それは最近の傾向で、長らくは異性愛。よりよき男女の関係を考えるみたいなのが長かったですよ。

それはそれとして、ある時、性教育の人たちもジェンダーフリーという言葉を使い始めたんです。そこで、なんか、つながってきちゃったんですよ。性教育バッシングとジェンダーフリー・バッシングが。それで山本宣治までつながっちゃった、ということですかね。

●デマゴギーの素材は提供してきた

編集部 えーと、また困ってしまって、どう考えたらいいんでしょうか。要するにバッシング派の批判に対して……なんとなく、あなた方が言っているうちに、このへんは正しくてその通りです。別のこっちは……と整理するものなんですか。

広瀬 というか私たちは――少なくとも私は、意味もなく、背景もなく、理由もなくバックラッシュ派の人たちがあんなこと言っていると思わないから。

金井 そう、そう。彼らの、バックラッシュ派のもっている不安というか恐怖と、こちら側のというか、一般的な人たちの感覚は、そんなに離れていないはず。

広瀬 だから、理解できると思いますよ。林さんが言ってること。

細谷 だけど、たとえばさあ、性教育の背景に共産主義があるとかは違うでしょう。彼らは、彼らにとって都合のよい敵をでっち上げようとしている。ジェンダーフリーに関しても同じで。「中性化しよう」と言っていた人も確かにいたのかもしれない、あるいはそう解釈できる場所もあったかもしれない。

でも、近年のジェンダーフリーの実践がそこを、みんなそうしているかと言うと、それはまた違うだろう。部分的なことを全面化して語っている、ある種のデマゴギーだと僕は思っているんですけどね。

ただ、彼らが言っていることも部分的には合っているということは、認めないといけないと思いますよ。

金井 つまり彼らがデマゴギーを作っているのだとしても、その素材を提供したかもしれないという、その自己言及的な認識を、フェミ側がもつかどうか問われているのではないかしら？ 私はそれがバックラッシュ対策という場合、バックラッシュと向き合う時の、こちら側の論争する時の姿勢の違いになってくると思うのね。

広瀬 まったく、そのとおり。あと、たとえばね、性教育と共産主義をつなげたり、フェミニズムと共産主義をつなげたりという批判の仕方は、日本だけを見ていると分かりにくいけれども、アメリカやイギリスなどを見ると、よくある批判のスタイルなわけで、それを、まあ、日本でも使っているわけでしょ。

金井 やはり現行のジェンダー秩序の解体を目指す思想ということでは、フェミニズムが国家、社会、家族を否定する共産主義思想になっちゃう。彼らのロジック中では、そこに行き着く。でも、そういうラディカルさは

フェミニズムはもってるし。

彼らは、人間が中性化するという、そのへんの怖さ、気持ち悪さをもっている。さらに同性愛や性同一性障害が、社会的にクローズアップされている。それが彼らの怖さ、気持ち悪さ、フォビアの感情につながっていて、それを増長している性教育とかジェンダーフリー教育とかがバッシング対象になる。

性教育が「性の多様性」を言う前は、バックラッシュ派の性教育への対応はどうだったんだろう？

広瀬 性教育を長いスパンで見ると、これは日本だけではないけれど、いわゆる純潔教育的ではない性教育、自由主義的な性教育というように言われたりもしますが、それが、60年代ごろから広がり始める。

古い抑圧的な性道徳から心身を解放しよう、豊かでおおらかな性を生きよう、というようなコンセプトで性教育が実践され始める。恋愛を楽しみましょう、自分の性を楽しみましょうということが、強調されることもある。避妊も、そこではそのために必要だと位置づけられたんで、10代の望まない妊娠を避けるために「避妊をしましょう」みたいなのは、もつとあとなのよ。

金井 そりゃあ、そうだね（笑い）。

広瀬 でもそのころは日本では、そもそも性教育がマイナーだったから大規模なバックラッシュはなかったけど、欧米ではだいぶ前からありました。性教育には時には文化革命的な政治的メッセージも含まれていましたし。一貫して性教育は政治的イシューでもあるんですよ。

細谷 それは、70年代ぐらいのことと考えていいの？

広瀬 そうですね。いまの学校じゃ配れないような教材も、いろんな国で作られてましたよ。

金井 過激なの？

広瀬 いまの言い方だとそういう言い方になるのかもしれないけど。日本だけでなく、世界的な傾向です。そういう性教育をターゲットにして、イギリスでは、「過激な性教育バッシング」は、70年代からしつかり（笑い）始まってます。個人名もいろいろあがって。キンゼイ（「キンゼイレポート」の著者）やサンガー（1910年代から「産児制限」運動を実践・提唱）あたりが出てくるのは予想できるけど、ダーウィン（進化論の提唱者）なんかも出てくるんですよ、性教育批判の文脈で。

細谷 そうするとライヒ（ヴィルヘルム・ライヒ。性解放による社会革命を唱える。『性と文化の革命』75年、勁草書房など）とかが、1つの根拠になっていたわけ？

広瀬 そうですね。ライヒも出てきましたね。日本でもこのころ翻訳が出ていますね。

細谷 僕はそのころ、子どもだったと思うんだけど。大学生のお兄さんたちが、ライヒとかを使って政治的なメッセージを発しているというのは、ある程度情報として入ってはいたけれど、でもそれが教育界の中で、性教育の中でもそうになっていたというのは、子どもには全然伝わってこなかった。

僕は地方の国立大学の付属中学校だったんですよ。僕のクラスが性教育の実験クラスに指定されてて、先生が一所懸命教えてくれたんだけどね、なんか古くさいことでしたよ。それは、えーと71年ぐらいの話。僕の県にはニューウェーブの性教育はまったく入ってなかった。

広瀬 文部省が主導していた官製性教育では、そういうリベラルな実践はあんまりやってないでしょう。

●女の子の自己決定権が許せない？

細谷 それで、「ジェンダーフリー」が中性的な人物を育てるということが、さっきまでの議論ではポイントだったけれど、性教育の場合は、どこがポイントなんですか？

金井 やはり「寝た子を起こすな」かしら？。

細谷 でも、寝た子を起こすぐらいは、そもそも純潔教育以外の性教育をやる時は必ずやるじゃないですか。純潔か、それ以外か、というのが境界線なの？ そこじゃないんじゃない？

編集部 私の理解では、バッシング派が怒っているのは「自己決定」ですね。「そんなこと言うから、ホラ見ろ、女子高生が援助交際なんか走る」みたいな。それと若者の間では、クラミジアなどSTDの蔓延が先進国に共通していますが、日本の10代後半の女子の罹患率はトップクラスで、これはデータでも裏付けられる。彼らは、この責任も性教育に押しつけてしまう。

金井 本当は、そうした事実に対してこそ、性的自立、性的自己決定のためのエンパワーメント教育としての性教育が課題であるはずなんだけど。

広瀬 日本ではSTD、クラミジアが問題として使われていますけれど、たとえば欧米諸国だったら、その文脈では、10代の望まない妊娠でしょう。その国と時代に合わせて（笑い）なんでも批判対象に使えるんですよ。その、よろしくない現象をもたらしたのが性教育だ、という言い方はどこで

も共通している。

編集部 でも、ご承知のように10代の中絶率（母体保護統計）は、ほかの年代が減少する中で、やや上昇傾向が続いていた。

広瀬 長らく日本では10代の中絶率が上昇していると言っても、アメリカやイギリスなどとは桁違いに低い水準での上昇だったから、欧米諸国が10代の望まない妊娠を深刻な社会問題としてとらえたような状況では全くなかった。グラフだって日本では下を這っているみたいなものだった。ごく最近ですよ、10代というか20歳前後の中絶率が目立ってきたのは。

細谷 日本の若い世代は、クラミジア感染が多いのに、どうして妊娠が大したことないのかな。避妊はしている、ということ？ 単に生殖機能が衰えているだけじゃないのかな。男の子、女の子の生殖能力が低下してきている。そっちのほうが由々しき問題じゃないのかな、保守派にとっては。
（Sexual Science06年8月号につづく）

[表紙へ戻る](#)